

産地の研究室から/地域ブランドを育てる(23)

リレ一随筆

ヒロシマナ

(広島県立農業技術センター生物学研究所
育種研究室 栗田祐二)

はじめに

ヒロシマナ (広島菜) (*Brassica campestris* cv. *Hiroshimana*) は、約400年の栽培の歴史を有する広島県特産のツケナであり、信州のノザワナ (野沢菜)、九州のタカナ (高菜) とともに日本の三大ツケナと呼ばれている。ヒロシマナを原菜とする広島菜漬は、その鮮やかな濃い緑色と歯切れの良さ、独特の香味で消費者に親しまれており、広島を代表する贈答品、また、土産品として、その名声を得ている。

ヒロシマナは、不結球ハクサイに分類され、開張性で葉は大きくて欠刻がなく、葉色は濃緑、中肋の幅は極めて広く扁平、葉脈は縦に平行に走るなど、独特の形態をしている。

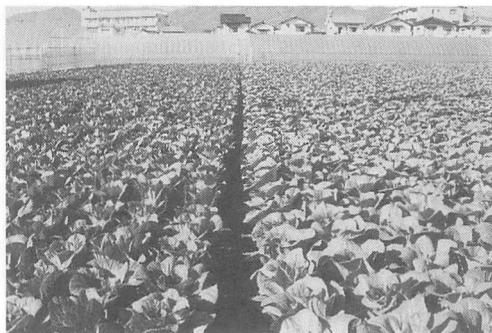
栽培の歴史

今からおよそ400年前の慶長2年頃、安芸藩主福島正則が参勤交替の帰途、京都本願寺に参詣した際、同行した安芸国観音村 (現広島市西区観音地区) の住人が、同所で種子を求め、持ち帰って栽培したのが初めといわれている。しかし、当初の草姿は、現在のものとはかなり異なり、葉形は長く、中肋の幅は狭い、ミブナ (壬生菜) に近いものであったらしい。それから、選抜淘汰され、さらに明治の初年頃に、安佐郡川内村 (現広島市安佐南区川内地区) の木原佐市氏が京都本願寺詣りの折、某寺の菜園より母本を入手し、在来種と交配して改良を加え、現在の形になったといわれている。

昔の呼び名としては、京都由来からキョウナ、中肋の形が扁平なことからヒラクキナと呼ばれていたが、近年、広島県特産として全国的に広く知られるようになってから、ヒロシマナと呼ばれるようになった。

栽培概要

広島県内のヒロシマナの栽培は、県西部を中心に県南部の島しょ部地帯から県北部の島根県境までの2市10町で行われている。栽培実面積は、平成6年現在で約60haである。最大の産地は、古くからの産地である太田川流域に広がる沖積砂壤土の八木地区、川内地区、緑井地区、中筋地区などの広島市安佐南区で、約38haと全栽培面積の63%を占めている。しかし、



ヒロシマナの栽培状況

広島市安佐南区は、市の中心部から北へ10~15km程しか離れていない都市近郊農業地帯であり、近年、都市化が進み、栽培面積の減少が著しい。そこで、代替産地として、このほかにも幾つかの市町村で試験的に栽培が行われており、今後とも栽培地域は拡大していくものと思われる。

広島菜漬の需要は、以前は冬期に集中していたが、最近では周年、贈答品や土産品として需要がある。また、スーパーやコンビニエンスストアなどの新規需要も開拓され、周年供給がますます求められるようになってきた。このため、原菜としてのヒロシマナも周年生産が求められるようになり、産地は県内各地のみでなく島根県にまで拡大してきている。ヒロシマナの作型は、1月から3月にかけて播種する春播き栽培、4月から8月中旬にかけて播種する夏播き栽培、8月下旬から10月にかけて播種する秋播き栽培の3作型に大別される。春播き栽培は、広島市安佐南区、夏播き栽培は、県北部の比婆郡比和町と山県郡を中心に行われている。秋播き栽培は、県北部では早 (10~11月) 出し用として、広島市安佐南区では普通期 (12~1月) 出し用として、県南部の島しょ部地帯では遅 (2月) 出し用として行われている。

春播き栽培は、加温育苗後にトンネルまたはハウス内に定植する。この栽培では、定植後にトンネルまたはハウス内で低温に遭遇するため、収穫期近くになると抽苔が起り、品質低下が問題となっている。夏播き栽培では、軟腐病が最大の問題となっている。このため雨除け栽培が行われているが、完全に防除することはできない。さらに、高温乾燥による心腐れ症、高温ストレスによる生育遅延なども問題となっている。秋播き栽培のうち、早出し栽培では生育初期が高温であるため、夏播き栽培同様、軟腐病の発生が問題とな

っている。また、近年、広島県では根こぶ病の発生地域が拡大しており、ヒロシマナでも生育の初期が高気温となる秋播き栽培で最も多発して、問題となっている。当センターでは、ヒロシマナの栽培地域のうち2市2町で根こぶ病の発生を確認している。今後も根こぶ病の発生地域は拡大していくものと考えられ、ヒロシマナの産地拡大の阻害要因になると考えられる。

広島県立農業技術センターの紹介

当センターは、明治33年、広島市国泰寺に広島県立農事試験場として発足し、明治43年に賀茂郡西条町（現東広島市西条町）へ移転した。昭和25年、広島県立農業試験場に改称し、昭和44年には、現在地の賀茂郡八本松町（現東広島市八本松町）へ移転した。このとき、果樹科は果樹試験場として独立し、豊田郡安芸津町へ移転した。平成3年に新たに生物工学研究所を設立し、果樹試験場を果樹研究所として統合して、広島県立農業技術センターと改称した。間もなく創立100周年を迎えようとしている。

現在の研究組織は、本所は5部1研究所（総務部、企画情報部、作物研究部、園芸研究部、環境研究部および生物工学研究所）であり、その他に県北部の山県郡大朝町に高冷地研究部、県南部の島しょ部の因島市重井町に島しょ部研究部、豊田郡安芸津町に果樹研究所がある。研究対象は、水稻、ムギ、ダイズ、イグサ、野菜、花き、果樹等幅広い分野を受け持っている。



広島県立農業技術センター（本所）全景

ヒロシマナの試験研究の取り組み

現在栽培されているヒロシマナの品種は、在来種と若干の市販品種のみである。これらの品種は、いずれも秋播き栽培の普通期栽培に合わせて育成されたものであるため、作期および産地の拡大に伴って、前述したような栽培上の新たな問題点が発生している。そこで、当センターでは、作期と産地に適応した品種の育成に取り組んでいる。

春播き栽培用では、晩抽性、夏播き栽培用では、軟腐病抵抗性、高温乾燥による心腐れ症耐性および高温ストレス耐性、秋播き栽培用では、根こぶ病抵抗性と軟腐病抵抗性を育種目標としている。

遺伝資源の収集は、財団法人広島県農業ジーンバンクと共同で行い、当センターではそれを利用して育種を行っている。根こぶ病抵抗性品種の育成では、戻し交雑法によりB₃世代まで育成し有望な系統を得ており、明るい見通しが立っている。今後、一層良質な品種育成を推進するために、選定した育種素材がヒロシマナと交配できない場合には、細胞融合あるいは胚培養などのバイオテクノロジーを利用して、有用遺伝子をヒロシマナに取り込むことを計画している。現在までにヒロシマナと根こぶ病抵抗性のケールとの細胞融合法を確立している。育成する品種は固定品種かF₁品種かについては、まずは固定品種を目標としているが、最終的にはF₁化を目指している。しかし、F₁品種育成のためには、その親系統の育成に長い年月を要する。そこで、薬培養を利用して育種期間の短縮を図ることを計画し、現在までにこの手法を確立している。

おわりに

ヒロシマナを取り巻く状況は、古くからの産地において栽培面積が減少し、県北、島しょ部地域へ拡大傾向にある。この傾向は今後とも続くと考えられる。また、ヒロシマナを原菜とした広島菜漬以外の新しい漬物も開発されるなど、その利用方法も変化し始めている。

当センターでは、変化する時代のニーズに対応できる特産ヒロシマナの育種について、今後も様々な取り組みを続けていく計画である。